

# 物は存在しない — “Pen is this” の証明

—— 定義存在学は英語では証明不可能である —

Shinichi Yoshimi

Independent Researcher, Okinawa, Japan

Email: akbfp443@me.com

ORCID: 0009-0008-8121-8947

Dec 01, 2025

## アブストラクト (abstract)

存在とは認識であり、認識されないものは存在しない。では、「存在しないもの」を認識することは、そもそも可能なのか。

本稿では、言語を「存在を認識した結果としての形状」と捉え、言語の構造そのものが「存在の認識の形」を決定するという立場をとる。

言語の特性は大きく二種類に分類できる。

(1) 自分（主観）が存在することを前提に構築された言語／(2) 自分が存在しないことを前提に構築された言語。

この差異が、認識におけるズレを生む。

自分が存在しないと認識できる言語は「物が存在しない」という結論を受け入れる構造を持つ一方で、自分も物も存在すると前提する言語は「存在の不在」そのものを扱うことができない。

重要なのは、われわれが本当に存在するか否かという事実ではない。そうではな

く、「存在している／していない」と認識させる言語特性そのものが存在するという事実である。

本論文は、英語では“Pen is this”が真にならず、日本語では“Pen is”が真として成立するその理由を、「認識の言語構造」から導き、定義存在学（Definitional Ontology）は英語では証明され得ないことを示す。

## 定義（記法）

### 記法（定義存在学における定義）

主体 基準。

主観 存在が基準となる認識。

客観 定義が基準となる認識。

この論文での定義であり、筆者の別の論文では別の定義として利用しているが、定義の固定化は意味をなさないあくまでもこの論文の中での定義として利用してもらいたい。

## 1 認識は文法のズレである

英語圏の幼稚園において、教師はペンを手に持ち、こう言う：

*This is a pen.* (本稿では簡略に “*This is pen*” と記す)

日本語では、同じ状況で次のように言う：

「ペンです。」

日本語話者は、内部的にはこの文を

“*Pen is (this)*”

という構造として認識している。

従来、この違いは単なる「文法差」として説明されてきた。しかし本質は文法ではなく、認識構造の違いである。

英語： 「すでに存在しているものを指し示す言語」

日本語： 「現にあらわれている状態を、そのまま言語化する言語」

この差が、「何を存在とみなすか」の差になる。

## 2 状態と事実のズレ

なぜ日本語では “*Pen is*” が成立し得るのか。日本語話者は実際には、

*Pen is this* (ペンはこれである)

という認識を保持しているが、*this* に相当する部分を省略できる。

その理由は明確である。教師が行う次の二つの行為：

1. ペンを持ち上げる
2. それを指し示す

この一連の非言語的行為が、すでに *this* の役割を担っているからである。

したがって、日本語では「行為そのものが *this* であり、行為が状態を語っている」。そのため、生徒は *Pen is this*・*This is pen*・*Pen is*…などと多様な解釈をしている。

一方、英語では：

「私はこれを指し示している → それはペンである」

という事実報告の連鎖を言語化するため、*this* を省略することができない。

### 3 言語化の基準：状態か、事実か

認識を言語化する際に、「状態を述べる」のか、「事実を述べる」のかという基準は、言語によって異なる。

日本語：状態言語 (state language)

英語：事実言語 (fact-report language)

このとき、

- 状態：客観的に見える。「こうである」という現前。
- 事実：一見客観的に見えるが、「誰が・どう観測したか」という観測主観に依存している。

このズレが、日本語の “Pen is”、英語の “This is a pen” という構造の違いとして現れる。

## 4 定義存在学とは何か

定義存在学は、次の立場から出発する：

「存在」とは、認識・定義・構造によって与えられるものである。

もし認識行為そのものを主観として扱うなら、認識されない物体には存在がなくなる。

英語の構造はまさにこれを体現している：「人間が指し示したものだけが存在する」。

*This is a pen* という文は、

- 「人間がこれを指し示した」という主観的行為
- 「その対象が pen と定義される」という分類行為

という、二重の主観構造によって成立する。

逆に日本語の “Pen is” は、「ペンという状態が、ここにある」という、客観から独立した存在状態を前提する。

### (1) 「Pan is」 の問題

日本語ではよくある例として：教師が英語を教える際に、誤って *Pan is* と発音し、生徒に伝える場合がある。このとき、日本語話者の世界では、教師が持っている対象・指し示している状態が *Pan* と定義されてしまうため、その場においては「教師の前では、そのペンは *Pan* である」という認識が成立してしまう。——それは、「状態」の側が定義に先行しているからである。

## (2) 英語における客観の硬化

これに対し英語では、*This is a pen.* という構造を取るため、どの教師が持ったペンであろうと、*pen* という客観的事実は変わらない。

ここから、英語世界においては次の結論が導かれる：「英語における認識能力の対象にならないものは、英語世界では存在しない」。英語は、*what is that?* と問える対象だけを世界に残し、それ以外を世界から排除していく構造を持つ。

日本語の場合、英語の *what is that?* は『*This is what*』という文法になるため、英語と日本語の認識の違いと言う事実は証明されている。

## 5 主観的認識の致命的欠陥

主観的認識は、数学における二次元グラフに似ている。二次元グラフは、0を基準にしなければ描けない。0を基点とする座標構造は、絵画の構成にも応用できるが、0を基準に描く限り、モナ・リザを模倣することは容易でも、モナ・リザを超える絵は描けない。なぜなら、0（基準）を保持する限り、既存の構造をトレースしてしまうからである。

同様に、英語という「主観固定言語」は、認識の原点を常に主観に固定し、認識の可能性を主観中心に限定する。この構造の上では、「自分の外側の存在」や「存在の不在」そのものを扱う哲学は、本質的に立ち上がってこない。

## 6 現代文明・英語・同一体としての破壊

ここまで議論を踏まえると、次のような結論が見えてくる。現代学問の行き詰まりは、『哲学の欠如である。』——哲学とは本来、「自分以外の存在を認識しようとする学問」である。

したがって、「自分を主観として記述する言語」だけを用いる限り、自分以外の存在を証明することは不可能である。

このとき問うべきは次の問題である。「哲学を記述する際に、ギリシャ語でしか語れないものがあるのか？」——答えはイエスである。ギリシャ語には、存在そのものを問うための構造があり、英語には「主観的事実」を記述する構造はあっても、同じ形での存在論的記述は不可能である。

現代研究に携わる全ての者は、この問題をもっと真剣に探求しなければならない。現代学問がギリシャ語から離脱したのと並行して、経済や政治は発展してきた。これは事実である。

## 7 集合体から同一体へ：英語文明と人類の滅び

ギリシャが滅びたのではない。人類が「集合体」を拒絶しただけである。

集合体文明：多数の異なる存在が共存し、差異と緊張を保ちながら進化していく文明。

同一体文明：一つの基準、一つの言語、一つの主観にすべてを揃えようとする文明。

現代文明は、明らかに後者——同一体の文明へと傾いている。その基礎は、世界共通語としての英語に集約される。英語を選ぶということは、集合体ではなく同一体を選ぶということである。

英語が滅びるのではない。英語が唯一の基準となったとき、滅びるのは人類そのものである。なぜなら、

同一体とは破壊であり／集合体とは進化だからである。

そして、英語で記述される数学は数学から哲学を排除している。本当の数学は哲学と数学を分けないギリシャ語に由来している。ギリシャ語もしくは日本語で記述される世界こそがシンイチ数学である。

## 付録 (Appendix)

### 付録 A ギリシャ語の言語存在論

ギリシャ語が哲学を扱える一つの理由は、主語を明示せず、単に「ある (*eimi*)」と言語化する事をした。つまり、(*eimi*) とは日本語では「ある (*aru*)」と表記できる。これらは、存在しない事も存在するという状態であり、英語訳としては名詞になっていない。

英語で存在を訳す場合、場所や用途などで単語が違うが、それらすべてを総称（抽象化）して名詞にし言語化した単語が日本語とギリシャ語には存在している。英語は「*aru*」を *this/that/what* でしか言語化しているが、その構造に気づいていない。

つまりギリシャ語では *Pen is aru* と言っても通じたはずであるが、筆者は 2000 年前に戻って会話する事は出来ない。

### 付録 B state language と fact-report language

言語を抽象化してとらえた時に何を伝えているのかが、state language と fact-report language では違う。

日本語／ギリシャ語：「*Pen is aru*」 ⇒ 何か存在がいる。

英語：「*This is pen*」 ⇒ 私達が知っている存在がいる。

## 付録 C 視覚化の再現性

「円は点の軌跡であり、点とは存在である。」

「垂直は存在しないのは直線が存在しない、すなわち点は存在しない。」

「点とは、橢円の線であり、面であり、球であり、トーラスであり、 $\infty$  となる。」

これらは、シンイチ数学では証明できるが数学では証明できない。なぜなら、シンイチ数学の唯一の定義は  $\sqrt{1} = 0$  であるからである。

この論文では、英語と現代数学では証明出来ない事を証明したことになる。あえて付録として書くのは、英語と現代数学の今までの歴史的事実に対しての配慮である。

## 付録 D 日本語の数学「Point is me」

筆者は現代数学を「*Point is me*」と定義する。しかし、英語で「*Point is me*」と言つたら理解できないだろう。逆に言えば日本語では「*Point is me*」と言っても理解に苦しむ。なぜなら、日本人であるならば「馬鹿か天才なのは紙一重だ」という状態を理解してくれるだろう。

それが、「吉見真一」という状態であるのだ。

## 付録 (Appendix)

### 2. References

#### 参考文献

- [1] Yoshimi, Shinichi. *Shinichi Mathematics: A Symbolic Foundation Based on  $\sqrt{1} = 0$* . Zenodo, 2025.

DOI: 10.5281/zenodo.15533064

[2] Yoshimi, Shinichi. *The Shinichi Transformation*. Zenodo, 2025.

DOI: [10.5281/zenodo.15525952](https://doi.org/10.5281/zenodo.15525952)

[3] Yoshimi, Shinichi. *The Proposition Refutation Theorem*. Zenodo, 2025.

DOI: [10.5281/zenodo.15761091](https://doi.org/10.5281/zenodo.15761091)

## License

This work is distributed under the Shinichi Mathematics License v1.0.

© Shinichi Mathematics Project.

License URL: <https://doi.org/10.5281/zenodo.15386802>